

令和6年（2024）度 第3回 大阪府立西成高等学校 学校運営協議会 議事録

【日 時】 2025年1月25日（土）10:00～12:00

【場 所】 大阪府立西成高等学校 多目的室A

【出席者】 （会長）西田芳正委員（副会長）高見一夫委員 緋田隆平委員
田中俊英委員 臣永正廣委員 堂上勝己委員 西田吉志委員 東野佳織委員

【内 容】

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 議事
 - （1）「令和6年度 学校経営計画および学校評価（案）」
及び「令和7年度 学校経営計画及び学校評価（案）」
 - ① 令和6（2024）年度 学校教育自己診断アンケート結果について
 - ② 各学年の様子について
 - （2）49期生 進路状況
 - （3）その他
4. 閉会

（1） 「令和6年度学校経営計画および学校評価（案）」及び「令和7年度学校経営計画及び学校評価（案）」

① 令和6（2024）年度 学校教育自己診断アンケート結果について

・資料2の「2 中期目標」は資料3の学校教育自己診断を基に作成。約5年単位での目標になるため、来年度への変更もほとんどない。

・資料2「3 本年度の取組内容及び自己評価」

【割合は肯定感の維持率、（○%）は令和5年の維持率】

1. Inclusion を実現する	①他の人との協力(85.3%)→ 86.6% ②校内居場所カフェなど居場所を学校は気にかけている(89.7%)→ 87.3% ③人権・福祉の学習(92.6%)→ 94.1% ⇒いずれも高い評価
2. Competency を育む	①授業が分かりやすいか(89.1%) → 分かりやすいか 90.1%、質問しやすいか 85.9% ⇒去年を上回る ③インターンシップ引き受け企業(目標 70 社) → 74 社 ⇒昨年の卒業生の定着率は 84.8%(進路は 9 割目標)
3. Democracy を育む	①人権・福祉の学習(92.6%)→ 94.1%
4. 「地域連携」「地域協同」を育む	①N-TIME で労働問題や地域福祉の入門を学ぶ(88.6%)→ 93%(1 年生) ⇒フィールドワークなど新しい取り組み ②にしなりフェスタにてフィードバック(1/31 実施)

	○令和6年度学校経営推進費について ・e スポーツ用の大型モニター、太鼓の搬入などに使用 ・東京都立立川チャレンジスクール、東京都立世田谷泉高校に訪問 →資格取得での単位認定やアルバイト就労での単位認定 9時頃にはほぼ生徒がいない。昼頃から登校が増える(世田谷泉) ・12月には立花高校にも訪問 →ベースは普通科単位制 4年目以降の教室もある。 ○日本語教育について ・日本人のための日本語教育の必要性(51期生を対象に調査) ⇒日本語の活用に課題がある生徒でも批判的な内容を含めて記述することができる生徒がいる(ヤングケアラー、シングルマザーの生徒) 関心が高い分野では思考力・判断力・表現力が高い →逆に自身との関連性が低い分野では成績が低い
5. 運営改善で教育力を育む	資料3 学校教育自己診断【教職員】 ⑬教職員の適性や能力に応じた校内人事や校務分掌の分担がなされている ⑭各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している ⇒75%に達していない。校内の人事、分掌の適正化を図る ⑰教員間で授業方法等や学習の到達度等についてよく話し合いを行っている ⑱学校として教育全般にわたる評価をおこない、次年度に活かしている ⇒忙しくて話をする時間が取れないのでは？

<質疑応答>

Q1.

委員「学校教育自己診断の教職員への質問「本校の生徒は学習とアルバイトの両立ができていると思う。」の肯定回答が56.0%と他に比べて低い値となっているが、こういった実態があるのか」

第3学年主任「本校の生徒は非常に遅刻・欠席が多い。理由を尋ねると、寝る時間が遅いことをあげる生徒が多い。24時以降に寝ていると答える生徒も多く、生活リズムが乱れている。その原因としてアルバイトを22時までしていることがあげられる。学年主任として3年間働きかけてきたが、改善がみられない。アルバイトが終わり、1時に寝たとしても8時、8時30分に起きれば間に合うように9時35分登校にしているが、それでも遅刻してくる生徒がいる。登校時間が1時間遅くなっているから、その分夜はやく寝ようと考えて登校できない生徒もいる。」

Q2.

委員「先ほどアルバイトを単位認定している学校もあるということだったが、そのような学校では学習との両立について工夫していることなどあるのだろうか」

校長「先ほど申し上げた学校は、2部制・3部制の学校、つまり定時制の学校である。アルバイトをしている、時間をコントロールできている生徒もいる。家事など家庭のことをして生活リズムが乱れている生徒もいる。一方で、先ほど第3学年主任が言った話は、アルバイトのあとに「遊んでいる」生徒が多いということである。西成高校の登校時間は9時35分であるが、他校は8時30分登校のところがほとんどである。そのため、学校を早期に離脱した子と一緒に遊んでいる、流されているという現状があるのではと推測される。学校に対する優先度が低い生徒に対して、厳しくするのか優しくするのか指導のジレンマがある。またアルバイトをしている生徒は、社会によく順応できているという結果も出ている」

委員「就職後の定着支援において、高校生でアルバイトをしていると定着しやすいという結果がある。アルバイト支援は、採用支援だけでなく、アルバイト中の生活の様子を聞くなどアルバイトに受かったあとも継続してサポートすることが求められてきているのではないか。」

委員「生徒のアルバイトの職種や勤務時間などは把握しているのか。」

校長「統計的には調査していない。しかし、学校生活と人権アンケートにおいてアルバイトをしているかどうかを聞いている。5月時点ではまだアルバイトを始めていない生徒もいるので、コミュニケーションウィークや三者懇談で、どれくらいの頻度でバイトしているのかなどの質問をするようにしている。トータルでは7割ほどの生徒がアルバイトをしている。この数値は大きくは変化していないと思われる。」

委員「今までは、アルバイト面接を落ちてしまった生徒に対してのサポートを頑張ってきたが、その後のサポートについても考えていくことが今後の課題だと考える。」

Q3.

委員「この評価指標はだれがつくっているのか。」

校長「学校教育自己診断をもとに評価指標を私が設定し、委員会で協議している。」

委員「この評価指標は、なにかモデルスケールがあるのか。」

校長「とくにない。」

委員「この自己評価は誰がしているものか。」

校長「学校教育自己診断をもとに私が評価している。」

委員「情報に基づいてアセスメントし、目標を立て、戦略とアクションプランが考えられており、アクションプランも3つ～4つ計画されている。さらに自己評価もパーセンテージを出して、評価している。西成高校の学校経営計画及び学校評価は実によく考えられ、戦略的につくられている。次のステップにいくためには、次年度にむけて、新たな目標を決めていく際に、自己評価が高かった項目、達成し

た項目については、削除していく必要がある。これをしないと同じ戦略を繰り返していくことになってしまう。来年も同じ資料を残していつてしまうことになる。同じアクションプランが残っていくと、戦略をなんのために立てているのかわからなくなってしまう。全体的にとっても達成率が高いので、レポートや論文などに残していくと他の高校の参考にもなるのではないか。」

校長「基本的にその通りだが、高等学校の戦略や目標においては、継続性も重要だと考える。ステップスクール初年度に入ってくる51期生を見据えて令和5年度の学校経営計画を書き換え、5月の学校運営協議会においてみなさんに意見をいただき、修正をして、令和6年度の学校経営計画を作成した。本年度の学校経営計画では、51期生が卒業するステップスクールの完成年を想定して作成している。対してエンパワメントスクールのまとめは50期生になるため、来年の3年生がエンパワメントスクールのまとめをすることとなる。エンパワメントスクールでやってきたことがどうだったのか、そこで評価する。それぞれの学年の生徒層に依拠する問題ではなく、そこに向けて我々がどのように取り組んできたのかを考えようとしたとき、東京都は募集停止して新しい取り組みを行うが、大阪府は、エンパワメントスクールとステップスクールが切れ目なしに変わるように、切れ目なしに改革を行う。そのため、今年はエンパワメントスクールの学年が2つあって、ステップスクールの学年が1つあるという状況だった。来年は逆にエンパワメントスクールが1学年、ステップスクールが2学年となる。このようにエンパワメントスクールからステップスクールに変わるからと言って、学校としてのカラーが全く逆になってしまうわけではない。だからこそ余計にあいまいになっている部分が見えてくるのではないかと思っている。我々自身もエンパワメントスクールからステップスクールに継承していくべきことのほうが多いと認識している。大きな変化をさせているというつもりはない。それでも、9時30分はじまりにしたり、定期テストをなくしたりなどは、その都度その都度一定の評価をしながら進めてきた。ですので、次の指標を出すにも完成年を想定しているため、難しい。」

委員「指標を変える必要はない。戦略として非常に高いレベルで練られているものである。今の1年生が3年生になるときのことを想定しているのであれば、いじらないほうがいい。達成度が非常に高いため、西成高校の得意と不得意を分析できる。評価指標で90%以上の値が出ているのは、「Inclusionを実現する」の評価指標の③、「Democracyを育む」の評価指標の①である。」

校長「9割を超えている項目でいうと、「進路選択を行うとき」「産業社会と人間」「チャレンジ」が役に立つと思う」が1年生では93%が肯定的な回答をしている。そのため、今年度はN-timeやチャレンジの時間がよかったということだと解釈している。一方で、「人権と福祉について学ぶ機会がある」は3学年で94.1%が肯定的な回答をしているが、今年度は差別事象が頻発し、12件と府立学校で一番多い件数となった。これは先生方が、生徒の発言をあいまいにせず、1つ1つ指導をしているから件数が増加していると考えている。」

委員「戦略でいうと、アクションプランでこれだけ意識が高いということは、問題を発見できるということでもある。」

委員「51期生の日本語固有の知識・技能の習得ステップを分析した結果を、今後どのように活かして能力をはぐくむのか。戦略はあるのか。」

校長「以前、識字教室にかかわっていたことがある。その方々は、識字能力こそ低いものの、社会を読み取る能力に長けていた。その方々が、さらに字がわかり読めるようになれば、ほかのことがますますわかるようになった。これは高校生にも必要な力である。西成高校では、字を上手に書くことができる生徒が多かった。最近はその力が下がっている気もするが、文字を書いたり読んだりする力と言葉を聞いて理解する力を戦略的に授業に取り入れることがようやくできるようになったのではないかと考えている。今までの西成高校では、福祉と教育の連携を掲げてきた。福祉は、向上することをあまり求めておらず、安定をめざしている。学校に通ってほしい、不登校にならないでほしい、遅刻しないでほしい、家出しないでほしい、卒業してほしいというような思いが強かった。一方で教育は、もっとできるようになってほしい、こうなってほしい、こういう力をもってほしい、わかってほしい、理解してほしい、考えて書けるようになってほしい、という向上的な側面が強い。どちらの軸が強かったかというと福祉だった。徐々に福祉と教育が均衡し、生徒の人数が減り、先生対生徒の比率が下がり、先生がもう少し丁寧に見ていく環境がステップスクールになりできるようになってきた。そうになったとき、子どもたちの、読んだり、書いたり、聞いたり、話したりする力をどのように伸ばすのかを重視していきたいと考えた。いっぱい覚えることがしんどい生徒も多い。別に歩く百科事典になってほしいわけではない。もう少し人の話を聞いて、理解して、自分なりに考えて話せる、という力を伸ばしたい。しかしこれらの力は、クロームブックでノートを書いても伸びない。今回調査した1年生文章には、書いて消して文章を書いていった痕があった。手で書き、消す、書く、の過程が重要であると考えている。ICTが大切だと言われている時代だが、手で書く過程をもう少し授業に取り入れていくことで、生徒の能力が伸びていくのではないかと考えている。学校教育自己診断において「授業では自分の考えをまとめたり、発表する機会がある。」の質問に対して、1年生は93.7%の生徒が肯定的な回答をしている。これは中学校との差が原因だと思う。2・3年生になるとこんなもんかと思ってくるが、1年生は今までにそのような経験がないため、非常に驚いているのだと推察する。これが西成高校の最大の強みである。」

② 各学年の様子について

<1年>

- ・年度当初、学年目標を「人、モノ、時間を大切にしよう」と設定し、月間目標を階段上の掲示板に掲示し、視覚的に意識できるようにわかるようにした。
- ・人について
自分も他人も大切にするというところで、自己診断の「自分自身が成長した」、「自分のいいところを学校で活かそうとしている」、という項目、「自分と違う意見を尊重することができる」、「他の人と協力しあうことができる」、という項目の肯定感がとても高い。人を大切にするという観点では、すごく意識できたのではないかと感じている。
- ・モノについて
モノをなくしたという生徒はたくさんいるので、継続して指導していきたい。
- ・時間について
授業間遅刻(怠け)の指導にかかる生徒も一定数いるが、自分で時間を見て教室に入っている生徒も多いので、時間を意識することができていたのではないかと。
- ・その他
イベントをたくさん実施し、自分たちで自分のいいところを発揮しようと声掛けし、力のある生徒を伸ばすという視点と、こぼれおちないようにするという視点で各クラス意識づけをしてもらった。有志の発表でも、2

0名程度の生徒が前に出て発表し、すごく自己肯定感があがったと感じている。

- ・転退学について

年度当初170名中7名在籍のみで163名が通っていた。すでに転退学をした生徒、今後転退学の手続きをしていく生徒が現在16名程度。生徒指導にのれない生徒が半数ほど、学校になかなか通えない生徒が半数ほど。150名弱が進級できたらと思っている。

- ・2年生に上がると、インターンシップなど進路に関する話が多くなっていくので、1年生の3学期から2年生の0学期だよという話をしている。進路に対する意識づけや、クラスや担任が変わり環境の変化になかなか着いていけない生徒も多いと思うので、進級のイメージを持たせながら、現在学校生活を送らせている。2年生は中だるみと言われるが、進路や卒業後の話をしながら引っ張っていきたい。

<2年>

- ・短縮授業が多かった昨年度と比べて今年度は6時間授業が増え、しんどい1年だったと感じている。
- ・イベントについても、インターンシップに始まり、体育祭、文化祭、2年生のテーマ別人権学習、宿泊学習、などすごく忙しくて大変だったことを踏まえると、彼らなりに一生懸命頑張ってくれたと思っている。
具体的な中身としては、まず人権学習は3つのテーマについて学び、すべてのテーマで講演に来てもらった。その中でも、「こどもの権利」については卒業生に来てもらい、西成高校の先輩が話しているというところすごく意義があった。1月31日に「にしなりフェスタ」で発表。
宿泊研修については、最終的に152名が参加した。行けなかった生徒は全員で20名ほどいたが、参加した生徒については、振り返りのアンケートで「行ってよかった。」という声がたくさんあったので、宿泊研修の大切さを実感している。
インターンシップを通して、仕事についての大変さを学び3日間を過ごすことができた。アルバイトはお金ももらえるということもあり、承認されるというところが大きいと思っている。働くときも、会社にとって必要と思ってもらえるように生徒たちに指導していくと進路活動にも乗っていきけるのではないかと考えているので、これから3年生に向けて、担任、学年で進路と連携をとりながら生徒たちが前向きに取り組めるような声掛けをしていきたい。
- ・学年目標にもあるように、一人ひとりが主役になってほしいと思っていたが、50期は大人しく、全体の行事となるとなかなか前に出られない生徒が多い。学年行事は教員も生徒主体で考えて実施することができ、いい取り組みだと感じた。
次年度は進路に向けて自分自身と向き合いながら、行動していけるようにと思っている。できるだけ多くの生徒を進級させて就職に向けて頑張っていきたい。

<3年>

- ・文化祭では、生徒自身、学年やクラスにおいて自分たちで楽しんで盛り上がっていたのではないかとと思う。3年生らしく見通しを立てて取り組んでいた。
- ・反省点として、3年生になっても「アルバイトがあるから残れない、バイトやから無理。」ということが生徒の言葉として多く、学校とアルバイトを両立できていないと感じる。高校生は学校が最優先であるということを3年生になっても指導している生徒が多く、もっと意識づけできていたらよかったと思う。
特に就職活動を通して、自分の意見を考えて書くという点でも、担任が引っ張って履歴書を書かせたり面接で話す内容を考えたりして就職につながった生徒が多く、なかなか自力で考えて文章化したり、話したりすることが難しくなっていると感じた。
実際、授業では文章が書けていなくても評価に繋がるが、社会に出ていくにあたって文章を書く能力を3年

生になってから身に着けさせるのは大変なので、1年生から継続して積み重ねて指導していけたらいいなと感じた。

進路保障室から注意、指導して態度が改善された生徒も見られたので、進路保障室と連携しながら、次のステップで忘れずに活かしていきたいと思う。

- ・全体を通して最後踏ん張って欠時OVになりそうな生徒もなんとか粘って単位を取ることができそう。146名スタートで143名ほど卒業できそう。できるだけ今いるメンバー全員で卒業させたいと思っている。

<質疑応答>

Q1.

委員「3年春に仕事理解ガイダンス、年明け内定が決まっている中で卒業生講話を実施しているが、生徒自身の評価や感想を聞きたい。」

進路保障室長「仕事理解ガイダンスでは、校長からも事業所の方に、少し成熟しきれないかもしれないと伝えてもらっている。その中で一生懸命頑張る生徒と乗り切れない生徒もいる。卒業生講話では、まだ進路が決まっていない生徒も自分の希望している職種で話を聞いた。一生懸命働いている姿はしっかり聞けていたと思う。感想は一言二言だけでなく、内容について書いている生徒もいて、しっかり聞いて自分事として捉える機会になったという実感はある。」

Q2.

委員「1年生はステップ1期生としてキー学年だと感じている。主任の発表の中でも、1年生自身がいろんな学び、気づき、変化があったように、短くはあるが10か月ほどで変化していると感じる。3年生にみられるような社会に入っていく、大人になっていくという変化ではないが、自分自身を肯定しているように思う。1年生自身の変化を現場の教員は実感しているのか。現場の雰囲気はどのようなものか。」

1年学年主任「各クラス担任が行事のたびに挑戦してみないかと声掛けをしている。その中でチャレンジしてみたいという声があり、そのような環境を整えていきたいと思って、いろいろな行事で前に出て活躍できる場を設けている。緊張しながらも、前に出なさそうな生徒も頑張ってくれて、そのあとの感想でもよかったという生徒や、次あったらやってみたいという生徒もいる。そのような場を設けて、担任が背中を押してくれてできていると思う。中学生のころは中心になっていない生徒が多かったと思うので、自分から前に出る生徒や、それを陰ながら支える生徒もいて、自分の役割が与えられて、自分の居場所を見つけられているという認識はある。」

Q3.

委員「発達障害や虐待サバイバーなどエースサバイバーの子どもたち（小児期逆境体験を持っている子どもたち）が自分を大切にしないのは仕方がない。そのような背景をもった生徒は西成高校には多い。その事実の分析だけで終わるのではなく、先生とのコミュニケーション等を通して生徒が自信を持つていくことは可能なのか。チャレンジしようという気になるのか。」

1年学年主任「動機がない生徒もたくさんいるが、少しでも動機が見える生徒には声をかけてチャレンジした生徒も多かった。おとなしい生徒が序盤で前に出てくれたことで、自分もできるという感覚になっていた。」

校長「ベースは1年生に限らず失敗に寛容。授業やいろいろな活動でも、やらないことに対しては指導するが、失敗したことに対しては指導でなく、発言することが恥ずかしいという気持ちがあったが、発言することへのハードルが下がった。1年生はそこをもう一步押したら前に出ることができたというのが他学年と少し違うと思う。」

(2) 49期生 進路状況

- ・学校斡旋内定率は1月17日時点では83.8%。その後2名追加。
- ・進路区分としては、現在86名が就職、35名が進学。
- ・ここ3～4年、フリーターが20名程度出ていることを受け、卒業生講話の際に、フリーターや進路未決定者向けのクラスを作る等の取り組みを実施した。
- ・就職決定者の内訳は資料4のとおり。前回出したものから増加している。
未決定者の中には現在ハローワークにつなぎ、学卒求人も含めて今後探していく者も含まれている。
ハローワークから一般求人で探していく場合は学校斡旋ではなくなる。
- ・進学先未定の生徒については、まだ受験が終了していない者が3名。結果が出れば人数が決定する。
- ・全体としては、遅刻欠席数がとにかく多い生徒が多数。就職試験を受けて落ちてくる生徒の中には、事業所から欠席日数について理由を聞かれたが、納得できる回答ができなかったところがあった。
就業継続を見込むとき、欠席数が大事になってくる。欠席数の大切さをあらためて実感した。
1・2年生で付いた欠席数を減らすことはできないが、3年生になってから少なくすることは印象としては非常にいいので、生徒への声掛け等していただければ。
- ・あともう少し、就職希望の生徒がいる。4月までには決めていければと思っている。

<質疑応答>

委員「大卒の初任給が30万を超えるようなことが報道されているが、全体としては0.9%くらいしか上がっておらず、報道だけがひとり歩きしている状態。また、転職サイトがどんどん報道されている。転職サイト側は転職させたほうがお金になるが、こちらはせっかく4～5年育てた人を替えられて非常に困っている。最低賃金についても、高卒で24万程度と言われても現状難しい。世間的に賃金を上げる流れがあるが、中小企業は賃金ベースを全員上げるのに対して、大企業は違うやり方をしているように思う。ニュースに惑わされないようにしなければならない。」

委員「初任給は上がっているが、2年目3年目のほうが厳しい感じはある。」

委員「最低賃金の上昇で、中小企業は小規模事業所を中心につぶれてしまう。」

委員「政治と経済の問題を生徒とどう考えていくか。」

委員「転職サイトの支援と言えば大卒のホワイトカラーかと思っていたが中小企業でもあるのか。」

委員「大卒に限らず、現場仕事でもある。」

(3) その他

校長「令和8年度の行事予定の見直しをしている。今は2年生の秋以降、人権学習、キャリア学習、宿泊研修とタイトな状況。タイトさを緩和しつつ、宿泊研修については費用の高さも含めて検討している。方向性としては、インターンシップを1学期から2年生の11月に、宿泊研修を2年生の7月に、カルチャーフェスタを12月にと全体的に均等化できないかと考えている。宿泊研修

についてはどこへ行くかではなく何を体験できるのかを考え、費用を6万円程度におさえたい。2泊3日で体験と思い出に残る遊びができれば。」

委員「オープンファクトリー、O-ROUNDへの参加とご協力ありがとうございました。靴の町、皮革の町として地域の地場産業を知ってもらうということと、今年は会場として西成高校を使わせていただいたことや、PTAの皆さんには映画上映のご協力をいただきありがとうございました。来年度は会場としてではなく、違う形でご協力いただければ。詳細が明らかになればよろしく願います。」

委員「今年は6時間授業が増えて大変そうだったと聞いている。それに伴って授業の出席率等に影響はあったのか？」

校長「出席については変わらない。6時間授業が今年増えたというよりは、一昨年に6時間授業が多かった反省から、昨年が極端に少なかった。その影響で食堂の営業日数が不足したり、が早く帰ることが原因で指導につながる事案が発生したりという問題が起こった。午後の授業をもう少し増やしてバランスを考えることにした。今年度は、新しいプランとして、4時間短縮を実施している。4時間だと昼休みを挟むので食堂を開けることができる。生徒も昼食をとれ、コミュニケーションウィークなどで午後から学校に残りやすい。3時間、4時間、6時間の組み合わせでほどよく短縮を取り入れたやり方をしている。」

委員「4月以降に民間企業や区内の団体に協力していただき、西成区の子ども、若者支援の仕組みづくりをしたい。例えば、西成高校の靴づくり部の留学を応援したり、識字・にほんご教室が中高生の学びにつながる機会として、アルバイト代を出せる仕組みをつくったりしたい。西成区内の子どもだけでなく、高校生や若者の夢を応援できるような仕組みをつくっていきたいと思っているので、ご意見をいただければ。」

委員「データの話では、『分けて比べる』ことがとても大切。東京の方で、中学生の頃の状況、高校生の今の状況を経済状況がわかる形でたずねたアンケートでは、貧困層で中学時代に疎外経験が出ていても、高校ではクラスの状況や教員との信頼関係が大きく改善していた。しんどい子どもたちが比較的似た高校に集まって肩身がせまい思いをせずにすんだり、バイトができたり、教員の丁寧な取り組みがあったりして改善していると思われる。西成高校では9割近い生徒が学校教育自己診断で肯定的に答えており、高い成果が出ているが、生徒の背景別に集計したり、中学の時と比較したり、他校の結果と突き合せたりすることが、本校の取り組みを外へ広げていくことにつながる。」

校長「ステップスクールは10数年前から考えてきたひとつの理想形。どのように仕組みづくりしていくかをあと2年かけて持っていけたら。次年度以降もご意見を願います。」

以上